

エアミス
Airmys

非実在 探偵小説研究会

3



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会 3号 目次

読み切り短編

首切りパズル

麻里邑主人

5

五の悲劇

二丁

30

フォール・バニッシュ

桜居志連

133

潜入者

佐倉丸春

158

レビュー

極私的飛鳥部勝則全短編レビュー

麻里邑主人

147

企画

企画1 二〇一一年度エアミス研ミステリランキング

47

企画2 リレー小説

羊毛邸の殺人

あじさいクローバーZ(筑地朱恵、皐月あざみ、根倉野蜜柑、
一成真司、桜居志連、タイガー田中)

51

「羊毛邸の殺人」執筆陣によるネタバレ対談

120

「羊毛邸の殺人」解決編 私はこう予想した

127

表紙・扉ページイラスト ウスタアヤ

羊毛邸の殺人

あじさいクローバーズ

【序章】

毎年、夏が近付いてくる度に、ふちだとうこ 湊田塔子は憂鬱になる。今年で三十五歳、一八〇センチを超えるスラリとした高身長彼女の職業は、中高生を対象とした塾の講師である。世間、主に学生たちが夏休みで騒ぐ間が、この仕事にとつては修羅場となる。夏期講習――。

今やどの塾も行う、夏休みの間の集中授業。この期間、生徒にもよるが、普段よりも多くのコマ数の授業を受講する生徒が大半だ。講師の数は変わらないが、コマ数が増えるため、その分講師の休みが少なくなる。彼女が勤める塾では、週休二日が一日となり、普段なら夕方から始まる授業は、朝の九時から夜の九時までピッシリである。

生徒たちも「何故夏休みに塾なんか来なければならぬのか」とやる気のある者は少ない。彼女が勤めるの

は、いわゆる補習塾であるためその傾向は顕著である。はつきり言えば、それはこつちが言いたい台詞だ。やる気のない生徒。成績を上げる、何としても志望校に合格させるとうるさい上司。学生はまだいい。勉強していればいいのだから。

もともと彼女自身が中高生の頃はここまで真面目ではなかった。むしろその逆で、絵に描いたような不良だったと言っている。そんな彼女が、何を間違ったか今では塾講師なんてお堅い職業に就いているのだから、人生何が起ころるか分からないものだ。

授業が終われば、いつものように上司から残務を命じられ、結局終電に急いで駆け込む。『リクナビ』に書いてあった、就業時間と全然違う！と、思ったことが今となつては懐かしい。

空席に座り込むと、彼女は一冊の文庫本を取り出す。推理小説――。日々、ストレスと激務に追われる彼女が、

数年前に見付けた数少ない癒やし。行きの電車で最終章まで読んでいたので、残るは数十ページ。読む。食るよ。うに。仕事が始まるまでに読んでしまいたかつたが、読み終える前に駅に着いてしまったため、今日は一日中結末が気になつて仕方なかつた。

本を閉じる。まさか、こう落とすとは——。余韻に浸る。今回も、上手に騙してくれた。やはり、この作家にハズレはない。彼女は本を鞆にしまい込み、携帯電話を取り出す。最近買い換えたスマートフォン。そう、推理小説を読み終えたら、彼女が必ず見にくくブログがあるのだ。多くの作品を、丁寧に解説してくれている。慣れないフリック入力で、文字を打ち込む。

『黄金の羊毛亭』。

【第一章】

I

空は快晴。海面に照り返した日差しが眩しく、夏の訪れを告げていた。

「それにしても、遠くまで来たもんだな」

赤部光司あかべこうじは波立つ海を眺めながら呟いた。一七〇センチの痩せた体格の、今風の好青年である。海上の風が、潮の香りを運んでくる。

「疲れたのか？ 光司」

と、言うのは長田まさしだ。赤部と年齢、身長共にそう変わらないが、彼に比べるとやや地味な印象を受ける。「そりゃ、多少はな。でも、まだ大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

東京から新幹線で岡山まで、更に電車で移動して、今は船で瀬戸内海に浮かんでいるのだ。移動に疲れていても不思議ではない。

船は岡山の南にある漁村から、南に約七キロ沖に位置する孤島、通称『黄金島』おうごんとうを目的地とし、航跡を進めている。

「おいおい、こんな所でイチャつかないでくれないか。ここは船なんだから、行き場に困るだろう」

煙草を吹かしながら二人を茶化す中肉中背の好青年、もとい、好中年コイミッドルは五味乱人ごみらんと。二人とは二回りほど歳が違わずであるが、快活そうな外見が実際の歳よりも若く見せている。

「い、イチヤつくつて、何言ってるんですか山田さん！」
五味のからかいに長田は頬を赤らめ、必要以上に焦り始める。

「長田君、仕事の時は、五味と呼べといつも言っているだろう」

五味の本名は山田隆夫やまだたかおという。彼は雑誌の記者であり、五味乱人、というのとは彼のペンネームだ。仕事で自分を本名では呼ばないし、周りにも呼ばせないというのが彼のポリシーらしい。長田は彼の勤める出版社で、バイトのカメラマンを務めており、赤部は五味の助手という形で、今回の取材に同行している。

「若い奴らは、元気でいいねえ」

船を操縦するのは初老の漁師である。黄金島に行くために、漁村で船に乗せてもらっているのだ。

「全くです。それにしても、船長。今回は無理なお願いを聞いて頂き、本当にありがとうございます」

吸っていた煙草を携帯灰皿に押しつけ、五味は丁寧に礼をする。赤部と長田も、慌てて五味に続いた。

「いや、いいってことよ。大したことじゃないからな」

色黒の漁師が無愛想に答える。

「あの島には定期の連絡船とかの類はないからなあ。島

に行くには、こうやって送ってやるしか手がないんだな。もつとも、わざわざあの島に行きたがる奴らなんざ、ほとんどいないんだから、仕方ないんだが——」

それから、まじまじと二人を見て

「しかし、あんたらも変わってるね。取材とか言ってたが、あの島には何もない。昔は金山があつたらしいがね。今はただ、変わり者が邸やしきを造って住んどるだけだぞ」

江戸時代には金山があつた黄金島だが——当然、その名前の由来はそこから来ている——金が掘り尽くされた今では、ただの小さな孤島となっているのだ。そんな島に、わざわざ邸を建てて、住んでいる者がいる。

「その変わり者の、相村あいむらさんに用があるんですよ。これでも、アポを取るのに結構苦労したんですよ」

「ふーん。しかし、あんな変わり者を取材して、面白い記事になるのかね」

相村あいむら——。今やミステリファンで、この名前を知らぬ者はモグリである、と断言する者さえいるほどの有名な人である。しかし、逆にミステリファン以外には、ほとんどその名は知られていない。正しく知る人ぞ知る有名な人、それが相村氏だ。だが、相村氏はミステリ作家でもなければ、ミステリ評論家でも、ましてや編集者でもな

い。相村氏の名を業界に響き渡らせたものは、何と氏が運営しているミステリブログ、『黄金の羊毛亭』なのである。

「ミステリのファンなら、大体知ってますよ、相村さんのことは。多分、目玉の記事になるんじゃないですか」

赤部が会話に割り込む。

「そんなもんかね。まあ、俺あ、推理小説なんざほとんど読まねえから、分からないんだけどな」

船長は投げやりに答えた。

「長田君も、ミステリを読み出したのは最近ということだったが、相村さんのブログくらいは見にいったことがあるだろう？」

長田は他の二人とは違って、ミステリを読み出したのがここ数ヶ月と歴が浅い。赤部に影響されて——もとい彼に半ば強制的に読まされて——最近ミステリにハマりかけている、という次第だ。

「はい、読んだ本の『ネタバレ記事』を読んでから、『ネタバレ無し』の記事を読んで、次に読む本を探すのが、最近の日課になっていますね」

『黄金の羊毛亭』は老舗のミステリブログである。ミステリをメインに扱うサイトやブログは数あれど、ここ

までの知名度、注目度を誇るブログは珍しい。羊毛亭が大きな影響力を持ち、今も尚多くのファンに支持されている要因の一つに、一作品に、ネタバレ有り、無しの二つの記事を掲載するという読者への気配りがある。他のジャンル以上にネタバレが致命的になるミステリというジャンルにおいて、この気配りは嬉しい。手を抜くことなく、丁寧に考察された記事を、長期にわたってコンスタントに更新を続けた結果、徐々に読者の数は増え、ブログそのものの影響力も自然と大きくなっていった。今では、プロの作家も、自分の作品が氏のブログでどのように評されるのかを気にしている、という噂すらあるのだ。実際、氏のブログで、デビュー作が取り上げられなかったり、作品を扱き下ろされてしまった作家は、すぐに消えてしまう、という都市伝説もあるほどである。

そして今回、記者である五味が、相村への初めての取材に向かっているというわけだ。これまでも、ミステリファンの中では有名であり、ミステリ界における影響力も大きい彼へ取材しようと試みた者は数多かったが、相村氏自身あまり表に出たがる性格ではないため、断り続けてきた。そこで、以前から氏と交友があつた赤部のコネで、何とか取材のアポを取ることに成功したのだ。

この快挙にデスクは大喜びで、記事が書けた暁には必ず目玉の記事として大々的に取り上げられることを宣言した。「ところで、相村さんって、仕事は何をしてるんだらう。肩書きが『ミステリブログ管理人』って、収入があると思えないんだけど」

長田が素朴な疑問を口にする、「ああ、相村さんはもともと資産家だったのさ」と、五味があつさりと答え

る。「一生暮らしていく分には、困らない財産くらいはあるという話だよ。連れ添いに先立たれた上に、子供もいなかった相村さんは、これからは一人静かに暮らそうと、黄金島を買い取って、邸をそこに造つたらしい」

「ああ、なるほど。金持ちなんですね、要するに」
そうなったからと言って、わざわざ孤島に邸を建ててしまふというのは、いかにもミステリアニアらしい。

「もつともどうもそれだけではないらしいんだけど……」
「と、いうと？」

五味の意味深な言葉に反応した長田であつたが、「それにしても、俺たちが向かっているのは孤島の邸。しかも、そこには変わり者の主人が住んでる……ってなると、ちょっとワクワクしてこないか？」と、赤部が口

を挟む。

「な、何てこと言うんだよ……縁起でもない」

呆れ顔で否定する長田だったが、内心はまんざらでもなかつた。それは、最近目覚めたミステリ好きのサガのせいでも当然あつたのだが、心の何処かでトラブルを求めてしまう、単純な男心のせいでもあつたのかもしれない。

「だつて孤島に浮かぶ奇妙な邸、って、まんま『十角館』じゃないか。そりゃ、事件が起こつてほしいとは思わないけど、やっぱり楽しみだよ」

「じゅつかくかん……？」

興奮気味の赤部に対して、十角館とやらが分からない長田はそのテンションについていけない。

「ああ、オサはまだ読んでなかつたつけ。『十角館の殺人』って本があるんだよ、綾辻行人って作家の。傑作だから、東京に戻つたら是非読んでみるといいよ」

「おい、二人とも。騒ぐのもいいが、そろそろ到着だ。見ろ」

五味が指をさす方を見ると、島はもう間近に迫つて

いた。
十角館も気になるが、それよりも今は、さつき五味が

言いかけていたことが気になる。彼はいつたいい何が言いたかったのか。島に着いて、一段落したら聞いてみるか、とその時はまだ、長田は気楽に考えていたのだ。

II

「じゃあ、一週間後に迎えに来たらいいんだな？」

「ええ、よろしく願います。わざわざありがとうございますございました」

「ああ、台風が近付いとるようだからな。気をつけろよ」
五味たちを船から降ろすと、船長は元の漁村に戻っていった。

黄金島は小さな島なので、すぐそこには『羊毛邸』の姿が見える。

「船長さんが言つてた通り、本当に何も無いね……」

島には、かつてあったという金山の名残は全く見受けられない。多少木々が生い茂って、森のようになっていいる部分の邸の後方に見えるだけで、あとは岩山が広がっているだけだった。

「邸も、思ったよりも小さいんだな」

赤部は少し残念そうだ。

「まあ、相村さんが一人で住んでるだけなんだ。使用人が何人かいるという話だったが、それなら十分すぎる大きさだろう。ほら、行くぞ二人とも」

三人が荷物を持って歩き出そうとしたその時、邸から女が二人、五味たちがいる船着き場に近付いてくるのが見えた。

「あの二人のどちらかが相村さん？ 女の人だったの？」

薰という名前ならば、性別がどっちでもおかしくはないが、長田は勝手に、相村は男だと思っていた。インターネットで有名と聞くと、どうしても相手が男だという前提で考えてしまう。

「いや、俺は実際会ったこともあるけど、男の人だったぞ。さつき言つてた、使用人が何かじゃないか？」

そうこうしている間に、件の二人は、どどん五味たちに近付いてくる。片方はこの暑いのに、パンツスーツを華麗に着こなした、いかにも仕事ができる女、といったイメージの女性だった。歳は二十代の半ばだろうか。フォーマル仕様の眼鏡も実に似合っている。

もう一人はいわゆる、『メイド服』を着た女性。メイド喫茶で見えるようなタイプではなく、白いフリルに、濃紺のワンピース、ロングのエプロンスカートと、本格指

向（メイド服に詳しいわけではないが）に見える。顔立ちが幼い。二十代の前半、もしかしたら、まだ十代かもしれない。

「お待ちしておりました。五味乱人様御一行ですわね」

「ええ、そうです」

「私、相村の秘書を務めております、半井依子なからいよりこと申します」

と、パンツスーツの女性が、

「私は、メイドの芥川あぐたがわゆり百合でございます」

と、メイド姿の女性が自己紹介して、二人揃って丁寧なお辞儀をする。

使用人がいるとは聞いていたが、まさか秘書までいるとは。有名なブログ管理人とはいえ、果たして秘書が必要なのか？ と長田は不思議に思った。

「ああ、電話で応対して頂いた……。初めまして。私が記者の五味です」

「助手の赤部です。よろしくお願ひします」

「ど、どうも、カメラマンの長田です」

自己紹介を終えた後、何故か半井は何も言わずに長田と赤部の二人を凝視している。何か悪いことでもしてしまつたのだろうか。更に、芥川と名乗つたメイドも、ち

らちらとこつちを見ているようだ。非常に気まずい。

「あ、あの、もしかして、こんな大人数で押しかけてしまつてご迷惑だつたでしょうか？」

たまらず赤部がそう尋ねると、芥川が慌てたように首を振つて「いえいえ、そんなことはありませんよ。……」

ただ、貯蔵庫の食料が思っていたよりも足らなくてちよつと不安なだけでして」

「「……」」

それを聞いて、五味たち三人も不安になつたのは言うまでもない。

「ええと、相村さんはどちらに？」

と、沈黙を破つて五味が努めて明るくい口調で尋ねた。

もつとも、二人はわざわざ船着き場まで（大した距離ではないが）迎えに来てくれたが、肝心の主人がそこにはいないのは解せない。案内するというほどの距離もないのだ。

続きは、「非実在探偵小説研究会3号」でお楽しみ下さい。